

令和元年6月5日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02546

研究課題名(和文) 歴史社会言語学とコーパス言語学の融合による言語接触についての実証的基礎研究

研究課題名(英文) An empirical study on language contact: Corpus linguistic and socio-historical approaches to earlier English

研究代表者

内田 充美 (UCHIDA, Mitsumi)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：70347475

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：言語学全体においてコーパス利用がひろく一般的になる時期にあって、コーパスを用いた研究にすでに精通していた研究代表者と研究分担者は、それぞれの強みを生かして、英語史における言語接触のプロセスにせまる実証的な基礎研究を行った。成果として、これまで主に歴史言語学、書誌学分野や英文学の分野で研究対象とされてきた中英語資料のうち、あまり顧みられることのなかった翻訳英語資料を主たる観察対象として、歴史社会言語学の観点から翻訳と翻訳者を捉え直し、その言語使用のなかに他言語(翻訳元言語)との言語接触の痕跡の有無を探究した。その成果を論文として公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語史における言語接触の研究は、語彙の中に占める借用語の割合というふうに、言語接触の「結果」を、社会「全体の」傾向として、「単語のレベルで」述べるという手法が主流であった。本研究は言語接触の(結果というより)プロセスを明らかにするために、(全体というより)個人の言語使用に着目し、(単語のレベルを超えて)文や構文レベルでの観察と考察を行い、コーパス言語学と歴史社会言語学の手法を英語史研究に応用することの有用性をさらに強調することに貢献した。

研究成果の概要(英文)：We have published three papers in three volumes of an academic journal, and contributed one to a booklet of which we worked as the editors as well. The papers reported on our empirical research on William Caxton and his contemporary nobleman's English translation from the relevant French versions. The results of comparative analyses of the English and French versions of the same texts were evaluated against not only the literature in the fields of Historical English Linguistics and Book History, but also that of Historical Sociolinguistics. Studies on translation, we believe, deserve more emphasis in sociolinguistic approaches to language contact in earlier days.

研究分野：英語学, 言語学

キーワード：言語接触 歴史社会言語学 コーパス 翻訳 英語 フランス語 多言語

1. 研究開始当初の背景

20世紀の後半以降、英語学全般においてだけでなく、英語史研究にもコーパス(電子化された言語資料の集積)を利用することが一般的となってきた。その背景には、1991年に公開された英語の史的コーパスであるヘルシンキコーパスの存在が大きい。20世紀の終盤から2000年代にかけては、より大規模なコーパスがインターネット上で公開され、多くの研究者が利用しやすい状況が整ってきた。その内容は現代英語の資料のみから成るものが多いが、同時に史的な資料も充実を見た。特に、書き手と受け手の社会的属性が明らかにされている書簡の資料を収めたコーパスは、歴史言語学と社会言語学の融合をめざす研究分野への道を拓いたと言える。

英語史研究において言語接触の議論は、語彙のなかに占める借用語の比率というような「結果」の面に焦点が当てられる傾向が強かった。数百年単位の時代区分で歴史をとらえて言語接触が盛んであったという事実を伝える定型的な表現として、たとえば、「中英語期にフランス語の語彙が大量に流入したため、その結果、現代英語の語彙においても、法律・政治・料理にかかわる語はフランス語を起源とするものが多い」といった記述があるが、これはまさに、言語接触の事実を(1)語彙のレベルで(2)「結果」の面に焦点をあてて、述べているものである。また、言語接触が発生すると考えられるのは典型的には多言語使用の場であるが、これまでの研究では多言語社会を(3)「全体として」捉える傾向が強かった。しかし、英語に加えてフランス語、ラテン語、アングロ・ノルマン語が用いられていた中英語期のイングランドは多言語社会であったとはいえ、実際の言語使用者のほとんどは単一言語の使用者であったことが先行研究で明らかにされている。研究の対象は限られることになるが、個々の多言語使用者や特定の多言語使用の場に注目して具体的な言語使用を観察することの意義が再評価される傾向にある。

多言語使用者の代表的な例として翻訳者がいる。これまで翻訳研究は、言語学とは比較的距離のある学問領域(文学など)で行われてきた。しかし、他言語をみずからの言語で置き換え、その結果言語使用を拡散するという役割に注目すると、翻訳テキスト資料が今日的な歴史社会言語学の探究対象となりうることに気づく。これまでの一般的な言語学研究では、翻訳によるテキストは何かしら不純物を含むかのように捉えられ、「全体として」の議論のための分析対象としては不適当なものとして避けられる傾向があった。しかし個々の言語使用者(ここでは翻訳者)の多言語状況における言語行動を直接映し取っている資料として肯定的にとりあげ、そこに言語接触の影響が見られるのかどうかを逐一検討することには意義がある。これまでになされてきた「全体として」の「結果」に焦点をあてた膨大な研究成果と照合することによって観察結果を相対化し、「結果」に至るまでのプロセスの一部として提示できる可能性があるからである。

2. 研究の目的

近年急速に注目されるようになってきた歴史社会言語学の視点を取り込みつつ、言語接触の結果だけではなくプロセスにも焦点を当てながら、英語の変異と変化を言語接触の側面からとらえなおそうとすることが本研究の特徴である。現代英語研究、英語史研究、書誌学研究がそれぞれ積み重ねてきた成果を再評価して統合することを将来的な目標としているが、本課題の研究期間中には、言語資料に見出される語彙、文法や談話のレベルでの諸現象の分析を通して言語接触の具体例を明らかに示すことを目的とした。

具体的には、イングランドに印刷技術をもたらしたことで知られる William Caxton の多言語使用者、翻訳者としての側面に注目し、他言語の影響があると予想される言語資料、つまり翻訳テキストの英語を分析することによって、そこに見られる特徴を、その後英語に起きた変化との関連で、言語接触の観点から分析した。

3. 研究の方法

ヨーロッパ諸言語の作品を英語に翻訳し、印刷して流通させた William Caxton については、書誌学の分野において数世紀にわたる膨大な研究がなされている。言語接触の観点からの探究にふさわしい作品の選定のためには、これまでの書誌学の研究成果を参照する必要があった。Caxton が翻訳し印刷した作品についてもたくさんの先行研究があるが、直接の翻訳元テキストが何語で書かれていたのか、写本(手書き)だったのか刊本(印刷物)だったのかも明らかでない場合も多い。資料の探索は困難を極めたが、その過程で、大英図書館に保管されている刊本の現物を確認するために同館を訪れた際には、関連の写本資料に綴じ込まれた19世紀のものと見られる研究メモを発見した(その内容は論文の一部として公刊)。翻訳元のテキストについての調査はさらに複雑で、著者情報をはじめテキストの伝承、使用されている言語と言語変種についての研究は英国ではなく大陸側で行われてきたものも多いため、英語以外の言語で発表された論文や資料を丹念に探索する作業が必要となった。

以上の経緯を経て、複数言語にわたるテキストの伝承関係と、後世に遺された資料(サンプル)間の関連、さらには、後世の書誌学研究の歴史をたどるための研究対象として *The Dictes and Sayings of the Philosophers* を、語彙、文法や談話のレベルでの諸現象を詳細に検証するための翻訳作品としては *Paris and Vienne* を選定した。これらの作品はいずれも Caxton が印刷したもの

であるが、前者は Earl Rivers がフランス語版から、後者は Caxton がフランス語版からそれぞれ翻訳したとされている。しかし、上にも記したとおり、具体的な翻訳元がどの版であったかについてはいまだに確とは明らかにはなっていない。Paris and Vienne については、最も関連の深いテキストとして、写本（手書き）と刊本（印刷物）2 点のフランス語版が先行研究によってほぼ確定されていることから、それらの書き起こし資料を具体的な言語現象の比較検討のために使用することとした¹。あわせて、これらに深く関連すると考えられるテキスト（英語版とフランス語版）の写本と刊本の画像を、電子資料として収集した。

言語現象を詳細に検証するにあたっては、コーパス言語学の手法を積極的に採用した。具体的に言うと、英語とフランス語のテキストデータを必要に応じてコンコーダンサーなどに向け、電子的な検索機能を目で行う文脈の精査を行うための補助としたり、ワードリスト作成のステップを踏むことによって語彙や文法レベルでの分析対象の絞り込みを容易にするなどの手法をとった。しかし、中英語や古フランス語という、標準化（表現やスペリングなどが安定的になること）が進む以前の言語を対象としていることから、調査の各ステップにおいて手作業による再確認をその都度入念に行った。

4. 研究成果

期間中の研究成果として、論文を 3 件、共著の図書を 1 件発表した。以下「5. 主な発表論文等」の項目に付した番号—雑誌論文[3]—[1]、図書[1]—により、内容を以下に概説する。

論文[3]は、Caxton が印刷した *The Dictes and Sayings of the Philosophers* についての研究報告で、大きく三部構成となっている。まず最初に、これまでに書誌学分野で蓄積されてきた膨大な先行研究に基づいて、完全なもの、不完全なものを含めて複数存在する写本（手書き）と刊本（印刷物）の両方の資料に目配りをしつつ、それら資料間の関係がいかに複雑なものであるかを示すとともに、探索対象を拡げたたんねんな事実の掘り起こしと調査・分析の積み重ねが今後必要であることを指摘した。つづいて、マンチェスター大学図書館に保管されている 3 点の資料のうちの 1 点に添えられているメモについての考察を示した。このメモの存在はすでに知られており先行研究でもその一部が引用されていたが、全文を記した記録はこれまでなかった。われわれの論文ではその全文を書き起こして示すとともに、その書き手について、先行研究で提案されていた人物であるとするには無理がある可能性があることを述べた。第 3 部では、大英図書館に保管されている資料に綴じ込まれていた 19 世紀の著名な研究者のものと思われる手書きメモを書き起こした。その内容の一部はこの研究者がのちに発表した大著の一部となっているが、資料そのものについての評価が微妙に異なるなど、興味深い差異が見られることをあわせて指摘した。

論文[2]は、大英図書館に保管されている資料に綴じ込まれていた、もうひとつの手書きメモについての研究報告である。論文[3]で明らかに示したように、*The Dictes and Sayings of the Philosophers* の写本と刊本の両方を含む資料間の関連は複雑を極めている。この論文の前半では、これまで多くの書誌学研究者を悩ませてきたこの問題に直面したある研究者（ケンブリッジ大学図書館司書）の 19 世紀初頭に書かれたとみられる研究メモの全文を書き起こして示した。つづいて後半では、そのメモの内容について、同時代の文献や 20 世紀後半に行われた研究成果と照合しながら検討を行った。研究者が手にすることのできる資料が、距離や時間や制度の要素によって否応なく制限されること、そういった偶然とも言える要因によって研究成果も左右されうることをあらためて浮き彫りにする結果となった。

論文[1]と図書[1] は、中世後期までにヨーロッパ各地で人気の高かった騎士物語 *Paris and Vienne* の Caxton による中英語訳テキストと、それに最も近いとされるフランス語の 3 つのテキストを詳細に比較分析し、多言語使用者である翻訳者 Caxton が、翻訳という言語行為のなかで、フランス語の影響をうけていたのか否か、翻訳テキストの中にその痕跡が見られるのか否か、という観点から検討を行ったものである。

論文[1]では、現代英語で言うところの再帰代名詞 -self 形に着目した。Caxton の生きた時期は英語史の大きな流れで見たときには -self 形が広く定着する以前の段階にあたる。いっぽう、この時期のフランス語では、「動詞 + -self 形」に対応する表現形式が広く用いられていた。そのため、Caxton がフランス語から英語に翻訳を行う際に -self 形をどの程度用いているのかを調べることに意義があると考えた。論文ではまず、作品中に見られる -self 形の語形と頻度についての調査結果を示した。つづいて、-self 形ではない（ふつうの）代名詞を用いている場合との比較を、共起する動詞の種類という観点から行い、動詞によって、-self 形だけを伴っているもの、-self 形ではない（ふつうの）代名詞だけを伴っているもの、両方と共起しているものがあることを示した。また、前置詞とともに現れる場合には異なる傾向があることを明らかにした。最後に、フランス語のテキストとの詳細な比較検討を行った結果、Caxton は、単純に

¹ 英語のテキストおよび、フランス語テキストのうち写本 1 点と刊本 1 点の資料については、西村公正、尾崎久男の両氏によるものであることを謝して記す。

フランス語の構造を引き継いで英語表現を選択しているわけではないが、-self 形が用いられている部分については、翻訳元と考えられる箇所にフランス語の対応表現（いわゆる代名動詞）が見られる傾向を指摘した。

図書[1]では、因果関係を表す接続詞に着目した。Caxton の生きた時期は、現代英語で理由を表す接続詞 because が定着しつつある段階にあたる。この語は、フランス語の cause を内包していることからみても、フランス語との関連を探ることには意義があると考えられる。また、英語史上 because に地位を奪われる形で劣勢となっていく for との比較も重要な観点である。論文ではまず、for の対応関係を調べ、Caxton のテキスト中で for が用いられている箇所はおおむねフランス語の理由を表す接続詞 car に対応していることを示した。つづいて、because (by cause と綴られていることが多い) についての対応を見ると、フランス語の名詞 cause との対応はほとんど確認されず、pour ce que という理由と目的を表す連語表現に対応する傾向が強く見られることがわかった。さらに目的を表す pour ce que の文脈において、Caxton はフランス語の表現を反映するかのような表現を選択している傾向を指摘した。あわせて、検討対象とした3つのフランス語テキストは、目的を表す表現の選択傾向においてそれぞれ異なった特徴を示していることも明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

[1]

論文題目名: *Self-forms in Caxton's Paris and Vienne*

掲載誌名: *Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal* 131 号 (頁 47-64)

掲載誌 発行年月: 2019 年 03 月 査読無

著者氏名: Yoko Iyeiri & Mitsumi Uchida

[2]

論文題目名: Joseph Power's Note Attached to Earl Rivers's English Translation of *The Dictes and Sayings of the Philosophers*

掲載誌名: *Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal* 126 号 (頁 13-19)

掲載誌 発行年月: 2017 年 03 月 査読無

著者氏名: Yoko Iyeiri & Mitsumi Uchida

[3]

論文題目名: Two Modern Notes Attached to Earl Rivers's English Translation of *The Dictes and Sayings of the Philosophers*

掲載誌名: *Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal* 123 号 (頁 135-144)

掲載誌 発行年月: 2016 年 03 月 査読無

著者氏名: Yoko Iyeiri & Mitsumi Uchida

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

[1]

図書名 (共著): *Language Contact and Variation in the History of English*

出版社名: Kaitakusha

執筆箇所題名: *For and Because: A Comparative Study of Causal Conjunctions in Caxton's Paris and Vienne and Three French Versions of the Same Text* (頁 61-79)

執筆箇所著者氏名: Mitsumi Uchida & Yoko Iyeiri

編集者氏名: Mitsumi Uchida, Yoko Iyeiri & Lawrence Schourup

発行年月: 2017 年 11 月

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 家入 葉子

ローマ字氏名: IYEIRI, Yoko

所属研究機関名: 京都大学

部局名: 文学研究科

職名: 教授

研究者番号 (8 桁): 20264830

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。